

小林多喜二

1903(明治36)年秋田県生れ、4歳で北海道小樽市に移住。小樽高商時代から積極的に執筆活動を行い、旧北海道拓殖銀行に就職後、酷使される労働者の実態を描いた「蟹工船」「不在地主」などを発表。30年に上京、33年に特高警察の拷問によって死亡した。本格的な執筆活動期間は5年に満たないが、プロレタリア文学史上に残る数々の傑作を生んだ。

DVD-ROM 版

小林多喜二

草稿ノート

直筆原稿

プロレタリア文学の旗手、多喜二の創作過程に迫る



刊行にあたって



小林多喜二直筆資料デジタル版刊行委員会
代表 島村 輝

二〇〇八年初頭に巻き起こった『蟹工船』再評価の動きは、発表以来約八〇年ぶりに、学界、文学界にとどまらず、広く世間の関心と呼ぶ大きな出来事となった。この間これまで全集等で部分的に紹介されていた、小林多喜二「草稿ノート」が、先般個人蔵から日本共産党中央委員会の所蔵となった。この所蔵変更を機にそれらの貴重な資料と、各地に分散所蔵される小林多喜二直筆原稿等をあわせてデジタルデータとし、それぞれの資料に解題を付し、DVDに収録・出版し、広く学術研究に資することを企画した。この過程では、各地の文学館などに散在する、重要な原稿類をも、可能なかぎり収録する方針をとった。これまで未発見、あるいは『全集』未収録とされてきた資料のいくつか、発表作品に対する多喜二自身の手入れの跡などの資料も、手書き原稿に準ずるものとして、併せて収録することとした。今回まとめられた「草稿ノート・直筆原稿 データベース」を活用することで、作家個人の内面の問題だけでなく、文学作品が、人間関係などを含めた広義の「メディア」を通じてどのように社会化するのか、そのメディアにどのような「力」が加わってテキストが変形していくのかといった、歴史の力学の解明へのルートが見出されるだろう。これら資料の公開・公刊が、文学・歴史研究に大きく寄与することを確信している。

(フェリス女学院大学教授)

収録内容

■ 主な作品

草稿ノートおよび直筆原稿にあらわれる主な作品をとりあげ、初出の誌面を収録し、解説を付して草稿から単行本にいたる過程を概略できるようにした。対応する直筆資料はないが、多喜二が変名で発表した全集未収録作品も収録。

作 品	初 出 誌
1 「老いた体操教師」	「小説倶楽部」1921年10月
2 「スキー」	「国民新聞」1921年10月30日
3 「人を殺す犬」	小樽高商「校友会々誌」1927年3月
4 「万歳々々」	「原始林」1927年4月
5 「田口の「姉との記憶」」	「北方文芸」1927年6月
6 「女囚徒」	「文芸戦線」1927年10月
7 「防雪林」	「社会評論」1947年11～48年1月
8 「一九二八・三・一五」	「戦旗」1928年11～12月
9 「蟹工船」	「戦旗」1929年5～6月
10 「不在地主」	「中央公論」1929年11月
11 「戦ひ」(「不在地主」第12-15章)	「戦旗」1929年12月
12 「暴風警戒報」	「新潮」1930年2月
13 「救援ニュースNo.18.附録」	「戦旗」1930年2月
14 「工場細胞」	「改造」1930年4～6月
15 「オルグ」	「改造」1931年5月
16 「壁小説と『短い』短篇小説」	「新興芸術研究」1931年6月
17 「独房」	「中央公論」1931年7月
18 「安子(「新女性気質」)」	『地区の人々』(改造社1933年)
19 「転形期の人々」(序編)	「ナッパ」1931年10～11月 「プロレタリア文学」1932年1～4月
19 「転形期の人々」(前編)	「改造」1933年6月
20 「故里の顔」	「女人芸術」1932年1月
21 「文学の党派性」確立のために	「新潮」1932年4月
22 全集未収録「赤旗」掲載分	「赤旗」1932年4月～8月
23 「文芸時評」	「中央公論」1932年6月
24 「地区の人々」	「改造」1933年3月
25 「党生活者(「転換時代」)」	「中央公論」1933年4～5月

■ 草稿ノート

草稿ノートに付した番号は便宜的なものである。特に記載のないものは日本共産党所蔵。

草稿ノート(1)	「姉との記憶」ほか
草稿ノート(2)	「雪の夜」ほか
草稿ノート(3)	「その出発を出発した女(中編)」
草稿ノート(4)	「栄養検査」ほか
草稿ノート(5)	「誰かに宛てた記録」ほか
草稿ノート(6)	「(一九二八・三・一五の続)」ほか
草稿ノート(7)	「蟹工船」
草稿ノート(8)	「不在地主」
草稿ノート(9)	「暴風警戒報」ほか
草稿ノート(10)	「工場細胞」
草稿ノート(11)	「工場細胞」
草稿ノート(12)	(表紙欠損)「オルグ」(日本近代文学館所蔵)
草稿ノート(13)	「独房」ほか
草稿ノート(14)	断稿「転形期の人々 序編」(市立小樽文学館所蔵)
析々帳	1926年5月26日から1928年1月1日までの日記

■ 直筆原稿

直筆原稿のほかには、原稿から起こされ伏字の指定がされる前のゲラと、単行本収録にあたって本人によって書き入れがされた新聞小説の切り抜きを直筆原稿に準ずるものとして収録した。

「老いた体操教師」(日本共産党所蔵)	5枚
「蟹工船」(日本近代文学館所蔵)	91枚
「不在地主」(多喜二ライブラリー(佐野力)所蔵) 冒頭から3枚	
「不在地主」(日本共産党所蔵) 116枚(#30～145)	
「工場細胞」(川内まごころ文学館所蔵)	188枚
「壁小説と『短い』短篇小説」(日本近代文学館所蔵)	7枚
「新女性気質」(「都新聞」切り抜き)(日本共産党所蔵)	69回分
「転形期の人々(前篇)」(日本近代文学館所蔵)	49枚
「故里の顔」(北海道立文学館所蔵)	6枚
「文学の党派性 確立のために」(日本共産党所蔵)	42枚
「文芸時評」(日本近代文学館所蔵)	33枚
「地区の人々」(日本近代文学館所蔵)	106枚
「党生活者」(中央公論版ゲラ)(日本共産党所蔵)	87頁分

多喜二の肉声

澤地久枝

底の見えない時代の到来に、若い人たちが小林多喜二の『蟹工船』を読んでいる。

多喜二としては、その死の八十余年後に、生活に即した共感をもって迎えられようとは予想もせず、願いもしなかった「事態」であろう。

昭和の初年から、小林多喜二はぬきんでた存在であった。昭和八年二月二十日、特高警察の拷問によって殺されるまでの二十九年の人生、文学の窮極を模索し、政治活動と執筆のはざままで、ひたすら頂点を目ざして駆けのぼっていった人生であったと思う。

明治四十五年、大正へとときりかわる年に二十六歳で病没した石川啄木と十四歳若い小林多喜二。結核と貧困による死と、権力による抹殺と異っているが、多喜二を思うとき、わたしは啄木を思わずにはいられない。

啄木の放埒というべき彷徨に一度は批判をもったが、函館の啄木文庫で、ガラス越しに彼の筆写本を見た。それは、印刷物と見まがうほどの、精緻な英文の書き文字であった。どこにも希望のない晩年の、努力の跡である。わたしはここで、啄木と真の出会いをした。

このたび、小林多喜二の主な直筆資料のすべてがデジタル化され、一枚のDVDにおさめられる。

非合法下のきわめて限られた時間と条件のもと、最後の瞬間まで「成長しつつあった」作家（廣津和郎）の肉筆は、その抱負、煩悶、葛藤、挑戦をじかに伝える。

デジタル化という新しいメディアにより、まるごと小林多喜二と向きあう道がひらかれる。これこそ「朗報」である。

弟の小林三吾氏が、兄のデスマスクは「ぬけたまつげがついていて、辛い」と語ったことがある。「素顔」の多喜二を知りたくて、わたしは田口タキ、伊藤ふじ子をたずねる仕事をした。筆跡はその人の心の軌跡を正直に語る。そこから肉声が聞こえてくる。小林多喜二はさらに身近かな存在として、よみがえってくるのだ。

（作家）



無上の喜びを感じる

浦西和彦

小林多喜二は一九三三年二月二十日に残酷無惨な拷問によって虐殺された。満洲事変、日中戦争、そして第二次世界大戦へと邁進していった昭和前半の激動した時代を一身にシンボライズした文学者は、なんといっても多喜二であろう。多喜二は昭和という時代と社会を象徴する存在だといえる。この多喜二の「草稿ノート」や「直筆原稿」などをはじめとする極めて重要で貴重な第一級の資料がDVD-ROM版で刊行されることに、私はからだがふるえてくるようなわくわくする感動に襲われるとともに、無上の喜びを感じる。

活字本で読むのと違って、草稿や直筆原稿は、その多くの書き込みや削除跡から、多喜二の思索の跡、いろいろ苦慮した跡が読み取れるであろう。その筆蹟からは多喜二の肉声、その息づかいまで聞こえてくるであろう。「直筆原稿」のなかには、プロレタリア文学の記念碑的作品である「蟹工船」九十一枚をはじめ、「地区の人々」百六枚、「不在地主」百十九枚などの十二点の生原稿が含まれている。多喜二の生原稿が十二点も保管されていたことは驚嘆される。多喜二の著書は、『小林多喜二随筆集』（一九三七年六月十六日、書物展望社）までもが発禁となった。戦時下において多喜二の作品は随筆までもが禁止されたのである。そして多喜二の資料を保存しておくことが危険をもたらすかも知れないという状況でもあった。その上、空襲である。多喜二の第三吾や大竹博吉が保管していた生原稿やその他の資料などが東京で焼けてしまった。多喜二の場合は、ほかの文学者たちと違って、資料の消滅に帰せられる率が高かったのである。それだけDVD-ROM版に収録されている資料は大変に貴重である。それらが保存されていたことが全く奇蹟的な出来事であったといえよう。

今回のDVD-ROM版の刊行は、出版界にエポックを画したと思う。

（関西大学教授）



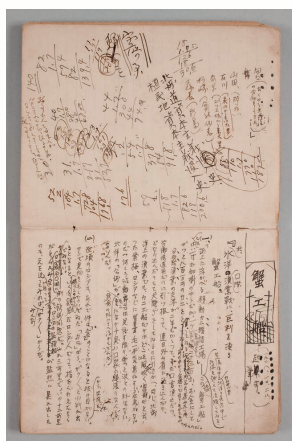
小林多喜二 草稿ノート・直筆原稿

源流から河口まで創作過程を緻密に検証

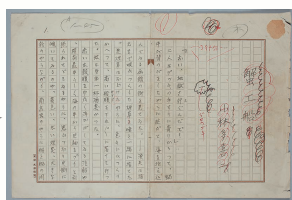
これまで創作の第一歩を示す草稿については、『小林多喜二全集』に一部が紹介されているのみであったが、2008年に日本共産党中央委員会の所蔵となり、今回このDVD版に収録することができた。また、各地の文学館等に分散所蔵されている直筆原稿、多喜二が単行本化前に手を入れた新聞連載の切り抜き、伏字の指定が施される前のゲラなども直筆原稿に準ずる資料として収録した。さらに多喜二が地下活動中に変名で発表した全集未収録作品も加えた。

苦闘の草稿から完成誌面までを追跡

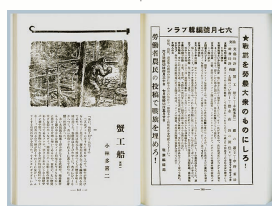
「蟹工船」



草稿ノート(7)より



直筆原稿

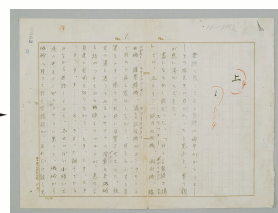


初出誌「戦旗」1929年5月号

「工場細胞」



草稿ノート(10)より



直筆原稿



初出誌「改造」1930年4月号

編 集：小林多喜二直筆資料デジタル版刊行委員会

島村 輝（フェリス学院大学教授）

日高昭二（神奈川大学教授）

萩野富士夫（小樽商科大学教授）

ノーマ・フィールド（シカゴ大学教授）

収録内容・構成：草稿ノートデータベース…15冊 2000頁

直筆原稿データベース……12点 800枚

作品データベース……………23点

仕様・形態：A5判解説＋DVD-ROM1枚（Windows対応）

価 格：100,000円＋税

ISBN 978-4-8419-0574-8

原本所蔵機関：日本共産党中央委員会

財団法人日本近代文学館

薩摩川内市川内まごころ文学館

市立小樽文学館

北海道立文学館

多喜二ライブラリー（佐野力）